



若者

## 古代への想い

岩崎 裕

1. 去年の秋信州に行った時のことである。蓼科・霧が峰は、大阪からはかなりになるが、東京からは近く、小説でよく見る茅野や小淵沢といった地名に行き当って、おもしろかった。あいにく霧のような小雨に見舞われたが、時折雲の切れ目から見渡された屏風のようにたち並ぶ青黒い遠方の山々に、車内の子供達は歓声を上げた。ここでお話しするのは、高原の裾野で古代の遺跡を見た感想と、それから連想された古代への想いとでもいうべきものである。

2. 遺跡は、尖石遺跡とって「今から5千年程前、八ヶ岳西麓の一帯に栄えた縄文中期の代表的遺跡である。三角錐状の巨岩を中心に、33ヶ所の 竪穴住居と 40ヶ所の 炬跡が地中から発見された。」(交通公社ガイドブック)はじめ私は「せんせき」と読み、かなり大きな岩を想像し、青空にそそり立つイースター島の巨石文化の人の顔を彫んだ巨岩のようなものを心像風景として描いていた。土地の人に道をたずねて、それが「とがりいし」と呼ぶことを教えられた。道沿いの小川の流れている所には、そこそこ出荷用の大根を家族あげて洗っている姿がみられた。めざす遺跡は、広々とした畑の中の自動車道をしばらく行って、トウモロコシ畑の中の小道を抜けて、斜面を少し下った所にあった。それは、松の木の下にある、下部が土中に埋まった、径が2、3mの、一見何の変哲もない石であった。土も、水苔のようなものでおおわれた石も、小雨を吸ってしっとりとし黒々としていた。そばに立つ簡単な説明板に、石の所々に物をこすりつけた跡のあることや、江戸時代に石のある場所の周辺から多くの石器類が出てきたので、村の人々によりこの石が祀

られていたことが読めた。磨製石器を使用した新石器時代には、この石は村の一角か、点在する小家族群の中心的な所にあり、古代人がやってきては、この石で矢じり等を研いたのであろう。そう思って石肌にさわってみると、所々滑らかな曲面がたどられた。しばしそこにたずみ見渡すと、空には雲がゆっくりと流れ、雨に打たれた生い繁る雑草が水々しい緑で囲りを取りかこんでいる。ふっと古代人のさんざめきが聞こえてきそうな静けさである。そうしていると、石に触れている自分が、石で石器を研いでいる石器時代人とは、時のみによって隔てられていることに、又石器類が掘出されていなければ、こんな小さな石は誰からも見過ごされていたであろうことを思うと、5千年もの時の流れをはさんで古代と現代を結んでいるものが、石に印されたこすり跡だけであるという心もとなさ、危うさに心を動かされた。小さく何も変つ



岩崎 裕 (Hiroshi IWASAKI), 大阪大学, 産業科学研究所, 中村研究室, 助手, 工学博士, 電子工学

た所のない石故に、身近なものに思われ、人の営みを伝えていることに、いとおしささえ感じた。

3. 次いで、近くの村の中にある尖石考古館を訪ねた。資料館は、普通の公民館よりも小さな平屋で、入口に、「御用の方は鈴を鳴らして下さい」とあった。地元でとれた蕎麦が蜜でいっぱい甘いリンゴをかじりながら待っていると、おじいさんがやってきて入口を空け電灯をつけてくれた。明るさをそれ程増したとは思われない蛍光灯の下に、少しホコリのたまったガラスの陳列ケースが、木造の屋内の空間を占めていた。それは白っぽい、なつかしい光景であった。ガラス製の石を、小刻みに打ち欠いて形づくった、矢じりや、片刃、両刃の石のナイフ、刃がギザギザの石の鋸などが、黒や半透明のべっこう様の光沢を放って並んでいた。それらは、さわれば手が切れそうな鋭どさを持っている。チョッパーやサイドスクレーパーといった名前もみられ、子供達から説明を求められた。想像で、木を削ったり、獣の皮や肉を切るのに使ったのだらうと答えておいた。今となつては、使い方のわからない石器も数多くあるということである。中には平たい石の一端を打ち欠いて刃をつけただけの石斧もあり、これには柄をつけてあった。手頃な棒にくくりつけられた石槍を手にとってみると、実際、動物を獲る道具としての重みが伝わってきた。局部をみいだした石器もわづかに陳列されていた。石器には打製石器と磨製石器があり、それらを使用していた時代を、それぞれ、旧、新石器時代と呼ぶ。打製石器には、石斥のように、利用するものが打ち欠いて作った石核の場合と、打ち欠かれた剝片の場合がある。ヨーロッパ大陸では、調製された石核をあらかじめ作り、それを打ち欠くことにより、一方の面がほぼ平面に近く、刃が連続な剝片石器も作られていたとのことである。細かな鋭い石器は、剝片である事には気付かなかつた。剝片石器の素材は、割れ方からわかるように、特異な石質を持ち、これを石器と呼んでいる点に盲点があるのかも知れない。ヨーロッパでは、鉱道を掘って石材を求めた点も、それが単なる石というよりも、今日におけ

る鉄鉱石にあたることを示していよう。石材の選び方や、打ち欠き方等、石器製作には、高度の技術を要したようで、これらの事を知ると、ていねいに綿の上に並べられていた小さな石器に親しみが湧く。一連の陳列品の中に、赤茶けた褐鉄鉱の中に含まれた、石器があった。これを見て、私はある種のむなしさを覚えた。化石を見ても、それらがあまりに昔の時代の痕跡であるので、むしろ時の流れを実感させないのである。しかし、人の手が加えられた「人工」の物が、鉱石の中に混じっているのを見て、時の流れの前には人間の営みや、その中で生み出された諸々も、石化し、残り得ても単なる無機物にしかすぎなくなると感じたのである。(褐鉄鉱；日本では火山地帯の温泉(鉱泉)より沈澱した褐鉄鉱層があり、長野県諏訪鉄山が有名である(平凡社百科事典))尖石遺跡は、諏訪湖の近くにあった。

4. 資料館には、発掘された縄文式土器も堂々と並べられてあった。こうしてここに残っているのは、数千年間に生み出されたであろう、実におびただしい数の中の、ほんの一部に過ぎないと思うと、又もやある感慨にとらわれた。撚糸文(よりいともん)や押型文といった見なれない言葉が並んでいる。押型文とは棒状の原体を回転して器体につけられた文様のことで、彫まれた棒が見本に置かれてあった。強い太陽の光と火炎を連想させる赤茶けた土器は、何れも野太い大らかさと強い生命を感じさせるのものである。そこには、その後の農耕民的な性格とはちがった、狩猟民的な荒々しささえうかがえるのではないだろうか。書物によれば、縄文式土器は、朝鮮にも他の大陸にもない独自のもので、中期になって、急に装飾性が増し、自由奔放な造型美が見出されている。しかし、これらは、長野、山梨の山岳地帯に限られている。それは信州が、自然溪流に恵まれ、山幸、川幸にめぐまれた楽土であったからとのことである。私は、無知のため、冬季は寒気きびしいし、こんな所に、何故に人が住んでいたかと思つたのであるが、八ヶ岳山麓こそ、縄文文化の中心地の一つであったのである。又、前期のもので、底の尖った土器は、実用性があつたの

かと首をひねったものであるが、これは炉の中に置かれた石の間に立てたからであると判った。さて、これらの土器は、血が通っているのではないかと思われる程、生々と力強いのであるが、その装飾性はゴタゴタとして、土器の実用化と共に、簡素化されていかざるを得なかったと思われる。これらに見られる、不可解さも秘めた、日本民族最初の美術は、どのようにして、何のために生み出されたのであろうか。私は、犬は道を歩いていて、右に行こうか、左に行こうか思案することがあるのだろうかと考えたことがある。縄文式土器に見られる造型美は、果して、古代人がそれらを生み出そうと意識して生み出したのか、あるいは、半ば無意識に土器に付加したのであろうか。

5. 原始美術について、文学部木村教授が、数年前の吹田祭で講演された。それは記憶が正しければ、次のようであった。「人類百万年の歴史の中で、美術作品が生み出されたのは、ようやく3万年前の旧石器時代後期である。この氷河時代の美術品として、洞窟や岩陰遺跡にみられる絵画、線刻画がある。洞窟奥深く、近づき難い場所に描かれた、これら壁画や天井画を実見し、これらの美術品が何らかの特別の意味を有していることを実感した。描かれた対象が、多大の努力によって得ることのできた、馬、牛等であったことから、狩猟生活の現実と密接に関連した、獲物を得たいという願望の表現であろうと解した。さらに、絵を注意深く見ると、槍等を突き立てたキズが見られることから、実物と似た絵に槍を突き立てることが、本物の動物に槍を立てることと疑わない、絵による呪い、「類感呪術」のためのものであった。このように、決して模放衝動や、遊戯衝動でなく、生存に無くてはならぬ、現代の我々にとっての科学と同じ役割を果たした一種の技術としての呪術に伴って、最初の美術品は生み出されたのである。」さて、アーノルド・ハウザ著、高橋義孝訳「芸術の歴史」(平凡社)によると「フィクションや仮象の世界、芸術や単なる模

像にすぎないものの領域は、彼らにとってはまだ、現実の経験界とは異質の独自の世界としての意味をもっていなかった。」のである。その後の発展は、ハウザによると次のようである。「やがて、採集狩猟生活から、牧畜、農耕生活に移行するに伴い、事物を忠実に模写するというよりは、抽象的・幾何学的様式がとってかわった。呪術の代りには、宗教的な儀式や習慣が登場する。自分の存在というものが、天候の良否、土地が肥えているか痩せているかなどということに依存していることが意識されるにつれて、善良で恵みを授けてくれたり、惑いは反対に意地悪で呪いをかけたりする様々の悪霊や精霊についての観念や、人間ばなれした絶対的なものについての観念が生じてきた。芸術はもはや、自然の模倣者ではなく、これと対立するものであり、現実に対して、そのあるべき姿を対置するものとなる。」このような観点から、縄文式土器をながめてみるのもおもしろいであろう。土器に付加されているのは、単なる装飾や、稚拙な写実ではなく、誇張され、抽象化された、現実のあって欲しい願望とみなせないだろうか。器には、いつも中味が豊富であってほしいし、炎はいつも赤々と燃えていてほしい。目に見える現象界と、目に見えない精霊界、死すべき運命を持った肉体と不死の靈魂とに分かれた世界を、目のあたりにして、縄文人は、こねあげた土くれに、自己の未分明な精神をぶつけ、願望を造型したのではないだろうか。さて、狩猟生活から農耕生活への移行は、永い年月をかけて行われたであろうし、それらが重なり合っていた時期も長かったであろう。本格的な農耕生活は弥生時代からというのが定説である。縄文時代中期からはじまった農耕生活の早期においては、天候に左右されないトチやカシの実(ドングリ)等の果実が果たした役割は大きかったといわれている。霧が峰では、トチやカシの雑木林が見られ、「池のくるみ」という地名が印象深かった。